

薬学専攻博士課程

平成 28 年度 授業計画書

平成 28 年 4 月 1 日

東京薬科大学大学院薬学研究科

薬学研究科の基本理念・目標

薬学研究科の大学院生教育では、ヒューマニズムの精神に基づいて、科学技術の発展および人類の福祉と健康に貢献するための薬学研究を推進できる高度な研究能力と学識を有し、国際社会で活躍できる人材の育成を目的とする。特に、高度医療、医薬品開発、大学教育などの分野において薬学研究者としての視点を有する医療人および指導者の育成に主眼を置く。

なお、社会人学生を育成する課程では、病院、企業、官庁等に在職中の社会人を受け入れ、上述した素養を持つ薬学研究者および指導者を育成する。

薬学研究科が求める学生像

- 1) 高い探究心および学習意欲を持ち、自己研鑽に積極的に取り組む人
- 2) 責任感や倫理観が強く、協調性のある人
- 3) 化学および生物学などの自然科学系のみならず、国際化に対応する語学力を身につけている人
- 4) 薬学に関わる科学技術と知識を駆使し、医療人として社会に貢献したいという強い意志を持った人

大学院薬学研究科の教育課程編成・実施の方針 (カリキュラムポリシー)

薬学とは様々な研究分野を統合する学問領域である。大学院薬学研究科では特論講義および専門演習で様々な研究分野の知識を身につけ、またそれを駆使して課題研究と論文作成を行う中で高度な技能と医療に関わる科学者としてふさわしい態度を磨き、自ら問題点の抽出と問題解決を進めていくことが実践できる研究者となるための指導を行う。

- 1) 薬学専攻博士課程においては、3年次に中間評価を導入し、その結果に基づく課題研究と論文作成のさらなる指導を行う。中間評価には、指導教授（又は准教授）が主指導教員として加わる他、対象学生の所属する教室とは別の研究科委員が副指導教員として各々評価を行う。
- 2) 薬学専攻博士課程においては、副指導教員制度を設け、課題研究と論文作成指導にあたる。

大学院薬学研究科の学位授与の方針（ディプロマポリシー）

学位：博士（薬学）

所定の単位を取得し、学位申請論文を提出し、研究科委員会が実施する最終試験に合格することに加え、薬学研究科にて下記のことを研鑽した者に学位を授与する。学位授与の基準は下記のとおりである。

- 1) 大学院カリキュラムの特論講義、演習および課題研究を通じた高度の専門知識と幅広い素養
- 2) 科学技術の進歩および福祉と健康に貢献する科学者に相応しい人間性と高い倫理観・使命感
- 3) 問題発見能力と問題解決能力
- 4) 国際社会で活躍できる語学力とグローバル性

なお、特論の総括的評価は記述試験により行い、課題研究論文の成果は、発表内容、討論、および最終試験である口頭試問に対する回答について、総合的に評価する。

大学院薬学研究科薬学専攻博士課程における博士学位審査の基準

博士の学位は以下の基準に基づいて審査される。

1. 博士（薬学）学位論文は、その研究課題に関連する薬学分野において新規性および独創性を備えた学術的意義を有する論文であること（新規性・独自性・学術的意義）
2. 博士（薬学）学位論文の内容は、医療現場における臨床的諸問題の解決や医薬品の開発に重点が置かれた内容であること（医療薬学に関連する研究的意義）
3. 博士（薬学）の学位を授与される者は、審査を受ける学位論文に関連する薬学分野において新たな課題を発見・探求する能力およびその基盤となる高度な専門知識を有していること（学識と課題発見・探求能力）
4. 博士（薬学）の学位を授与される者は、科学技術の進歩および福祉と健康に貢献できる人材に相応しい豊かな人間性と高い倫理性を備え、国際的視点からも社会的、医療的諸問題に対応でき、薬学の発展に寄与できる資質を有していること（人間性・倫理性と使命感）

I. 教務に関する事項

一般学生

1. 研究分野

本大学院薬学研究科薬学専攻博士課程は次に示す 9 研究分野からなっている。

医科学、臨床分析化学、生薬学、臨床生化学、衛生化学、薬剤学、薬理学、薬物治療学、医薬品情報学

2. 講義

(1) 別表による 9 科目の選択講義は、1～2 年次に 2 科目 4 単位以上の修得が必要である。

(2) 「英語特論」は博士課程 1 年次の必修科目である。

(3) 「演習」、「実習」、および「課題研究」と合わせ、合計 30 単位の修得が必要である。

別表 1 薬学研究科薬学専攻博士課程授業科目及び配当単位数一覧表

授 業 科 目	配 当 単 位 数		配当年度
	必 修	選 択	
医 化 学 特 論		2	1・2 前
臨 床 分 析 化 学 特 論		2	1・2 前
生 薬 学 特 論		2	1・2 前
臨 床 生 化 学 特 論		2	1・2 前
衛 生 化 学 特 論		2	1・2 前
薬 剤 学 特 論		2	1・2 前
薬 理 学 特 論		2	1・2 前
薬 物 治 療 学 特 論		2	1・2 前
医 薬 品 情 報 学 特 論		2	1・2 前
英 語 特 論	2		1 前
演 習	2		1
実 習	2		1
課 題 研 究	20		1～4
要 修 得 単 位 数	26	4	

※ なお選択講義は、以上の他、社会人学生の項で述べる、東京医科歯科大学「次世代がん治療推進専門家養成プラン」で夜間行われる講義（1科目1単位）によっても単位修得可能である。また、英語特論（必修2単位）は、各年度、4月～7月の毎週月曜日18時30分及び、水曜日15時30分より、本学医療薬学研究棟医201講義室にて行われる。そのいずれかを履修し、修得すること。

社会人学生

1. 研究分野

一般学生と同様、次の9研究分野からなっている。
 医化学、臨床分析化学、生薬学、臨床生化学、衛生化学、薬剤学、薬理学、薬物治療学、医薬品情報学

2. 講義

- (1) 1～2年次に、選択講義4単位以上の修得が必要である。一般学生と同様、別表1に示す9特論（1科目2単位）か、もしくは、東京医科歯科大学「次世代がん治療推進専門家養成プラン」で夜間行われる講義（別表2）（1科目1単位）から選択し、合計4単位以上を修得する。
- (2) 英語特論は、博士課程1年次の必修科目である。各年度、4月～7月の毎週月曜日18時30分及び、水曜日15時30分より、本学医療薬学研究棟医201講義室にて行われる。そのいずれかを履修し、修得すること。
- (3) 「演習」、「実習」、および「課題研究」と合わせ、合計30単位の修得が必要である。

別表2 「次世代がん治療推進専門家養成プラン」講義一覧表

授 業 科 目	単位数	配当年度
緩和医療学概論	1	1・2前
病院情報管理学	1	1・2前
がんの生物システム学概論	1	1・2前
低侵襲性がん治療II（集学治療）	1	1・2前
症状マネジメント（基本編）	1	1・2前
緩和ケア実践	1	1・2前
抗癌剤薬理学概論I	1	1・2後
抗癌剤薬理学概論II	1	1・2後
がん化学療法特論（基礎と臨床）	1	1・2後
がん臨床研究・エビデンス実践医療I	1	1・2後
がん臨床研究・エビデンス実践医療II	1	1・2後

※ 講義は、原則として東京医科歯科大学キャンパス（御茶ノ水）内で18時30分から行われるが、がん化学療法特論（基礎と臨床）のみ、本学医療薬学研究棟と東京医科歯科大学キャンパスの双方で同時に行われる（遠隔講義システム利用、開始時刻は18時30分）。別表2の内網掛けの5科目は「薬物治療学特論」に、またそれ以外の6科目は「医薬品情報学特論」として単位認定する。それぞれを2科目（2単位）以上修得する必要がある。

【選択科目の履修方法】

本課程の学生は、1～2年次に選択科目の中から4単位以上、必修科目との合計30単位以上を修得しなければならない。

平成28年度薬学専攻 授業日程（前期昼間の時間帯に東京薬科大学で開講）

月	火	水	木	金
医化学特論	薬剤学特論	英語特論 (15:30～17:00)	生薬学特論	
臨床分析化学特論			衛生化学特論	
英語特論 (18:30～20:00)				

※ 4月6日（水）講義開始

東京薬科大学にて開講される専門科目および東京医科歯科大学にて開講される専門科目のいずれも、選択する科目の履修申請を所定の期日までに本学薬学事務課まで所定の用紙にて行うこと。

【臨床薬学コースと基礎薬学コースについて】

本課程は、臨床薬学コースと基礎薬学コースの2コース制をとっている。

薬学部卒業生および薬学修士（薬剤師免許保有者）の学生は臨床薬学コースに所属し、1年次後期には「演習」および「実習」の中で東京医科大学病院での2～4週間の臨床研修を選択できる。臨床研修は、東京医科大学病院の10科の中から、学生が選択した1科において、医師指導の下に行われる。

一方薬学部以外の学部出身の学生は基礎薬学コースの所属となるが、本コースでは臨床における演習・実習は行わない（演習・実習の内容は、p.9を参照）。一方基礎薬学コースの学生は、1年次後期に薬学部の学部講義を受講することができる。

講義に関するそれ以外の点では、臨床薬学コースと基礎薬学コースの学生はいずれも共通である。

東京医科大学病院臨床演習・実習における、内科系および外科系の病棟研修の主な内容はそれぞれ以下のとおりである。

内科病棟研修の主な内容

- 1) 外来診療における薬物療法（疾患と病態を把握する、処方せんの組立や解析を学ぶ）
- 2) 回診への同行（疾患と病態を把握する、カルテの読み方や薬物療法について学ぶ）
- 3) 症例検討会への参加（その内容と参加者の討論の中で、臨床的センスを養う）
- 4) 服薬指導の実際（薬剤師や看護師による服薬指導に同行し、その実際を学ぶ）
- 5) 検査部門（診療科で扱われる検査の見学、検査の方法、検査値の見方や考え方を学ぶ）
- 6) 院内で開かれる講演会や勉強会への参加
- 7) 臨床研究の補助（文献調査やまとめ、データ解析、カルテ情報の整理などを含む）
- 8) その他（薬物療法に関連する事項、例えば TDM、DI、副作用モニターなど）

外科病棟研修の主な内容

- 1) 外来診療における薬物療法（疾患と病態を把握する、処方箋の組立や解析を学ぶ）
- 2) 手術見学（患部の病態や主な術式について理解する）
- 3) 回診への同行（疾患と病態を把握する、カルテの読み方や薬物療法について学ぶ）
- 4) 症例検討会への参加（その内容と参加者の討論の中で、臨床的センスを養う）
- 5) 服薬指導の実際（薬剤師や看護師による服薬指導に同行し、その実際について学ぶ）
- 6) 検査部門（診療科で扱われる検査の見学、検査の方法、検査値の見方や考え方を学ぶ）
- 7) 院内で開かれる講演会や勉強会への参加
- 8) 臨床研究の補助（文献調査やまとめ、データ解析、カルテ情報の整理などを含む）
- 9) その他（薬物療法に関連する事項、例えば TDM、DI、副作用モニターなど）

II. 特論単位認定に係る試験

履修した特論科目については、原則として講義終了後に試験を行い学業成績を考査する。合格した科目については、所定の単位の修得を認める。

なお、各特論において講義実施時間数の 3 分の 2 以上出席しなかった者には受験資格を与えない。試験を、疾病その他やむを得ない理由で欠席した者は、指

導教授または准教授の承認（署名・捺印）を得て、試験終了日より起算し3日以内（土日祝日は除く）に所定の届け出用紙に、診断書等の証明書を添付して、薬学事務課大学院係へ提出すること。欠席届が認められた者は、特論取り纏め担当者の指示に従い、追試験もしくはレポート課題等を受け、その結果に基づき単位認定の可否が判断される。

なお、東京医科歯科大学「次世代がん治療推進専門家養成プラン」で夜間行われる講義（別表2）の単位認定については、「次世代がん治療推進専門家養成プラン履修要項」に従って行う。

1. 成績の評価

成績の評価は以下の表に示す通りである。

評価	合・否
A	合格
B	合格
C	合格
D	不合格

なお成績の評価は原則として、出席、受講態度、および記述試験の得点状況から、総合的に行う。A～Dの目安は以下の通りである。

A：出席状況(2/3以上)、受講態度(良)、記述試験(80点以上)

B：出席状況(2/3以上)、受講態度(良または普通)、記述試験(70点以上)

C：出席状況(2/3以上)、受講態度(良または普通)、記述試験(50点以上)

D：出席状況(2/3未満)、受講態度(普通または不良)、記述試験(50点未満)

2. 単位の認定

履修した特論科目については、原則として特論講義の最後のコマに記述試験を行い、その結果と出席状況やレポート等の内容も含めて、総合的に成績を考查する。合格した特論科目について、所定の単位修得を認める。

3. 課程修了に必要な特論単位数

(1) 専門科目（昼間東京薬科大学にて開講：別表1）は、9科目（いずれも2単位）を開講する。一方専門科目「次世代がん治療推進専門家養成プラン」（夜間東京医科歯科大学にて開講：別表2）は、9科目（いずれも1単位）を開講する。以上の内4単位以上を修得する。

(2) 英語特論は必修で2単位を修得する。

III. 演習と実習

演習と実習は必修で、各学生が所属する教室または研究室で実施される。

臨床薬学コースの学生が対象となる臨床演習・実習については p.6 で既に述べたが、臨床薬学コースの学生も、臨床演習・実習を行っている期間以外では、本学の教室や研究室にて以下の演習と実習を実施する。

一方、基礎薬学コースの学生は、本学の教室や研究室にて以下の演習と実習を実施する。

演習と実習は、各2単位で、合計4単位を1年次に修得する。以下に、演習と実習の具体的内容を示す。

1. **演習**： 研究テーマに関係する学術論文の検索方法、その読み方、データのまとめ方、学会発表の仕方等を修得する。
2. **実習**： 化学物質の取扱い、実験動物の取扱い、検査キットや測定機器の使用方法等、研究テーマに関する実験の遂行あるいは調査を行うための基礎知識と技能を修得する。

IV. 課題研究

学生は所属した教室において課題研究として独自の研究を行う。学生は、課題研究の成果を学術誌に発表するとともに博士論文として纏める。課題研究テーマは各研究分野によって様々ではあるが、基礎薬学コースにおける課題研究は主に、基礎薬学的研究手法を用いた研究成果を臨床に直結させることを目標とする。一方、臨床薬学コースの研究は、主に臨床における薬物療法の有効性と安全性の向上を目的とし、その方法論は基礎薬学研究手法を薬物療法の最適化に応用することに基づくものとなる。いずれのコースも、本学の歴史の中で培ってきた薬学的研究基盤を糧として、臨床志向の研究を計画し実施できる研究者を育成する。そして基礎薬学コースの学生は臨床を強く志向した基礎研究者へ、また臨床薬学コースの学生は基礎研究手法に立脚した臨床研究者へと育成する。

以上、課題研究を通じ、本学独自の基礎と臨床の研究基盤を背景とした指導体制の中で、将来の薬物療法の指導者的かつ先駆者的役割を担う、臨床を強く意識した薬学研究者を養成する。

修了までの道のり

薬学研究科 薬学専攻 博士課程

講義科目区分	1 年 次	2 年 次	3 年 次	4 年 次
基礎科目(必修科目) 2 単位 1 年次前期	英語 特論			
専門科目(選択科目) 4 単位以上	選択科目で2年間の内、2科目4単位以上の修得が必要 医化学特論 臨床分析化学特論 生薬学特論 臨床生化学特論 衛生化学特論 薬剤学特論 薬理学特論 薬物治療学特論 医薬品情報学特論		【修了要件】 当該課程に4年以上在学し、所定の単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査および最終試験に合格することとする。 ただし、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者については、3年以上在学すれば足りるものとする。 ※3年での修了要件は現在、検討中	博士學位論文発表 博士學位記授与
演習科目(必修科目) 2 単位	演習			
研究(必修科目) 実習 2 単位 課題研究 20 単位	実習	課題研究		

演習:薬学部(6年制)卒業者に対しては、研究テーマに関する学術論文の検索方法、その読み方、その内容について学会発表を想定したセミナーで紹介出来るようにする。さらに、実習で実験内容およびデータ発表についても同様の発表が出来るように指導し、課題研究を進めるための準備を行う。1年次後期に提携する大学病院(臨床現場)での臨床スタッフとの演習を実施することが出来る。薬科学専攻(修士課程)修了者には、修士課程での研究内容をさらに深化させるため、先端研究の文献検索およびその応用について指導教員や大学院生との意見交換が出来るようにする。薬学分野以外の大学院出身者については、課題研究に関連する医療関連の先端知識の習得だけでなく、医療に関する基礎知識について、学生の理解度に合わせた指導を行う。指導教員は、学生に医療関係者としての薬学教育を理解させるため、学部講義の聴講を含めた指導を行うことが出来る。

実習:まず、原則として化学物質の取扱い、実験動物の取扱い等について、研究テーマの実験あるいは調査を行うための基礎知識の指導を受ける。なお、薬科学専攻(修士課程)などで、これらの基礎的な指導を受けた場合には、この段階を省略出来る。(指導教員は学生の習熟度を確認し、適切な指示を与える)。次に、研究テーマに関する実験に関する手技の修得を行う。実験あるいは調査で得られたデータを解析し、実験技術の確認を行う。実験あるいは調査結果を演習で発表し、指導教員との意見交換で改善点など検討し、さらに精度の高いデータを出せる実験あるいは調査が行えるようにプロトコールを作成し、それを実行する。なお、指導教員は、1年次後期に提携する大学病院の臨床スタッフの協力の下に臨床での実習を組み入れることが出来る。

平成28年度 薬学専攻博士課程講義予定表

講義時間 無印 9:30～11:00 ● 11:10～12:40
 ★ 15:30～17:00 ◆ 16:30～18:00
 ※ 18:30～20:00

講義室 医201講義室(医療薬学研究棟2F)

*外部講師

【前期】

月曜日			火曜日			水曜日			木曜日				
医化学特論		臨床分析化学特論		英語特論		薬剤学特論		英語特論		生薬学特論		衛生化学特論	
医201講義室		医201講義室		医201講義室		医201講義室		医201講義室		医201講義室		医201講義室	
月 日	担当者	月 日	担当者	月 日	担当者	月 日	担当者	月 日	担当者	月 日	担当者	月 日	担当者
4/11	三浦	4/11	●袴田	4/11	※Brooke	4/12	新槿	4/6	★Brooke	4/7	三卷	4/14	●早川
4/18	三浦	4/18	●袴田	4/18	※Brooke	4/19	新槿	4/13	★Brooke	4/14	一柳	4/21	●早川
4/25	古石	4/25	◆有田*	4/25	※Brooke	4/26	新槿	4/20	★Brooke	4/21	一柳	4/28	●早川
5/2	林(良)	5/2	●小谷	5/2	※Brooke	5/10	井上	4/27	★Brooke	4/28	一柳	5/12	●藤野
5/9	林(良)	5/9	●小谷	5/9	※Brooke	5/17	井上	5/11	★Brooke	5/12	一柳	5/19	●藤原
5/16	林(良)	5/16	●柳田	5/16	※Brooke	5/24	井上	5/18	★Brooke	5/19	松尾	5/26	●藤原
5/23	釜池	5/23	●柳田	5/23	※Brooke	5/31	白坂	5/25	★Brooke	5/26	松尾	6/2	●高橋
5/30	宮岡	5/30	●東海林	5/30	※Brooke	6/7	根岸	6/1	★Brooke	6/2	黒田	6/9	●高橋
6/6	青山	6/6	●東海林	6/6	※Brooke	6/14	根岸	6/8	★Brooke	6/9	黒田	6/16	★鍛冶*
6/13	伊集院	6/13	●藤井*	6/13	※Brooke	6/21	高島	6/15	★Brooke	6/16	横須賀	6/23	●平塚
6/20	松本	6/20	●古田*	6/20	※Brooke	6/28	高島	6/22	★Brooke	6/23	横須賀	6/30	●大沼
6/27	松本	6/27	●柴崎	6/27	※Brooke	7/5	瀬田	6/29	★Brooke	6/30	蓮田	7/7	●西山
7/4	矢内	7/4	●柴崎	7/4	※Brooke	7/12	瀬田	7/6	★Brooke	7/7	蓮田	7/14	●小倉
7/11	伊藤*	7/11	●横川	7/11	※Brooke	7/19	試験	7/13	★Brooke	7/14	三卷	7/21	●試験
7/25	試験	7/25	●横川	7/25	※Brooke			7/20	★Brooke	7/21	試験	7/28	●(予備)

* 岐阜薬科大学 教授
伊藤 彰近

* 理化学研究所 統合生命医学研究
センター メタボローム研究チーム
チームリーダー 有田 誠

* 東京理科大学薬学部
環境健康学教室 教授
鍛冶利幸

* 産業技術総合研究所 計測標準研究部門
有機分析科 バイオメディカル標準研究室
主任研究員 藤井紳一郎

* 東京薬科大学薬学部 元教授
古田 隆

医化学特論

1・2 年次前期 2 単位

担当者：青山 洋史、伊集院 良祐、釜池 和大、古石 裕治、林 良雄、松本 隆司、
三浦 剛、宮岡 宏明、矢内 光、伊藤 彰近（岐阜薬科大学 創薬化学大講座 教授）

■学習目標（G10）

臨床薬学における医化学の理解を深めるために、有機化学を基盤とする医薬品の創製や製造の新しい概念や手法について学ぶ。本特論では、当該分野の理解に相応しい講師陣を配するために、外部講師として1名の専門家の教授にご参加頂き、内容の充実を図っている。講義では、具体的な創薬・製造事例を通じて解説するとともに、創薬基盤を担う有機合成化学の考え方についても学ぶ。

■行動目標（SB0s）

- 1 環境に優しい有機化学と医薬品合成への応用について概説できる。（三浦）
- 2 アシルイミニウムイオン中間体の反応性を利用した有機合成反応および天然物合成について解説できる。（古石）
- 3 ペプチド化学と創薬化学の関わりを概説できる。（林）
- 4 天然物からの難治性疾患治療薬の開発を説明できる。（林）
- 5 核酸関連医薬品とその開発について概説できる。（釜池）
- 6 生物活性を有する海洋天然物とその合成法の開発について概説できる。（宮岡）
- 7 タンパク質高次構造の特徴に着目した創薬リード／シードの探索について概説できる。（青山）
- 8 分子イメージングを有機化学的視点から説明できる。（伊集院）
- 9 有機分子の立体化学について、医薬品合成の観点から説明できる。（松本）
- 10 医薬品合成の鍵となる立体制御反応について、その基本原理を説明できる。（松本）
- 11 代表的な立体制御反応とその医薬品合成における実例を説明できる。（矢内）

■授業内容

（回数、講義内容、担当者、対応 SB0s）

- 1 環境に優しい有機化学Ⅰ（三浦）（1）
- 2 環境に優しい有機化学Ⅱ（三浦）（1）
- 3 アシルイミニウムイオンを利用した有機合成反応（古石）（2）
- 4 ペプチドミメティックスの開発（林）（3）
- 5 天然ペプチドからの創薬（林）（4）
- 6 中分子ペプチドの創薬（林）（3, 4）
- 7 核酸関連医薬品の開発（釜池）（5）
- 8 医薬品開発を志向した天然物合成（宮岡）（6）
- 9 タンパク質の種類と形に基づく創薬リード／シード探索と構造展開（青山）（7）

- 1 0 分子プローブの設計・合成および創薬への展開(伊集院)(8)
- 1 1 医薬品合成に関わる有機立体化学の基礎(1)(松本)(9)
- 1 2 医薬品合成に関わる精密有機合成手法の基礎(2)(松本)(10)
- 1 3 医薬品合成における精密有機合成の実際(3)(矢内)(11)
- 1 4 伊藤彰近教授講演会
- 1 5 記述試験

■アクティブ・ラーニングの取組

- ・補助プリントを配布し、講義を進行しながら、空欄部分を記入させるようにしている。
- ・学生を指名して意見を述べさせている。
- ・学生同士で議論する時間を設けている。

■成績評価方法

出席状況、受講態度、および記述試験により総合的に評価する。

1) 形成的評価

- a:知識：適宜レポートを課す。
- b:技能：
- c:態度：受講状況（出欠等）を記録する。
- d:パフォーマンス：講義中に質問し、理解度を確認する。

2) 総括的評価

- a:知識：定期試験、出席点、提出物を総合的に評価する。
- b:技能：
- c:態度：受講状況（提出物等）を加味して総合的に評価する。
- d:パフォーマンス：学生同士や教員との議論内容にて総合的に評価する。

■教科書

各講義において必要に応じてプリント等を配布する。

■オフィスアワー

いつでも可。但し、要予約。

■準備学習（予習・復習等）

- ・講義前に講義資料を配布するので、事前に読んでおくこと。
- ・参考資料や課題を配布するので、よく読んで理解に努めること。
- ・講義資料の内容をよく復習すること。

臨床分析化学特論

1・2 年次前期 2 単位

担当者：有田 誠（理化学研究所 統合生命医科学研究センター）、小谷 明、柴崎 浩美、東海林 敦、袴田 秀樹、藤井 紳一郎（産業技術総合研究所 計測標準研究部門）、古田 隆（元東京薬科大学 教授）、柳田 顕郎、横川 彰朋

■学習目標（G10）

バイオ医薬品分析、包括的メタボローム解析、各種のセンサー開発、生体分子の機器分析、安定同位体トレーサー法、治療薬物モニタリングなど、分析化学の新技术と臨床への活用について学ぶ。

■行動目標（SBOs）

- 1 化学薬品との比較によってバイオテクノロジー応用医薬品（バイオ医薬品）の特徴と分析法について概説できる。
- 2 バイオテクノロジー応用医薬品（バイオ医薬品）の生産技術や品質管理について概説できる。
- 3 疾患制御に関わる生体内の代謝システムについて分析化学的視点から理解する。
- 4 マイクロチップ電気泳動の原理および遺伝子 DNA やタンパク質解析への応用について概説できる。
- 5 ボルタンメトリーの原理および薬学領域への応用について概説できる。
- 6 創薬の各段階における分析化学の役割や手法について概説できる。
- 7 分子間相互作用に基づく分離法や解析法の原理や応用例について概説できる。
- 8 バイオセンサーの種類やシグナル増幅能について概説できる。
- 9 生体分子を計測する際に利用される代表的な機器分析について概説できる。
- 10 核酸（DNA、RNA）を対象とする計測技術や標準物質開発について概説できる。
- 11 体内動態解析のための、安定同位体トレーサー法について説明できる。
- 12 安定同位体トレーサー法による体内動態研究の応用例を説明できる。
- 13 分子標的薬の HPLC による血中濃度測定法と臨床応用例を説明できる。
- 14 臨床で用いられる質量分析法（GC-MS、LC-MS）の基礎と応用が説明できる。
- 15 TDM における血中濃度測定と代表的な TDM 対象薬物の体内動態解析法が説明できる。

■授業内容

（回数、講義内容、担当者、対応 SBOs）

- 1 従来の化学薬品の分析と比較しながら、バイオテクノロジー応用医薬品（バイオ医薬品）の特徴と分析の考え方を解説する（袴田）（1）。
- 2 バイオテクノロジー応用医薬品（バイオ医薬品）を製造するときの生産技術や品質管理について解説する（袴田）（2）。
- 3 疾患制御に関わる脂肪酸代謝物の包括的メタボローム解析について紹介する（有田）（3）。

- 4 遺伝子 DNA やタンパク質の解析において、ハイスループット化・高感度化に活用されているマイクロチップ分析技術を解説する（小谷）（4）。
- 5 ボルタンメトリーおよび電気化学検出 HPLC などの例をあげて、電気化学分析法の基礎と薬学への応用を解説する（小谷）（5）。
- 6 創薬の各段階において用いられる分析化学的手法を列挙し、それぞれの手法の原理や特徴を示すとともに、計測値の取り扱いに焦点を当てながら応用事例について解説する（柳田）（6）。
- 7 固-液または液-液間に働く分子間相互作用を利用する高性能分離法や、薬物や生体成分間に働いている分子間相互作用を計測するための代表的な手法を列挙し、その原理と応用事例について解説する（柳田）（7）
- 8 バイオセンサーの種類や高感度バイオセンサーを設計する際に重要となるシグナル増幅能について解説する（東海林）（8）。
- 9 光分析や電気分析など、生体分子を計測する際に用いられる機器分析の原理や応用例を解説するとともに、最新の分析機器について解説する（東海林）（9）。
- 10 核酸（DNA、RNA）を対象とする遺伝子関連検査における計測技術の標準化や標準物質の開発動向について解説する（藤井）（10）。
- 11 安定同位体トレーサー法に用いられる安定同位体標識体の条件と合成法、同位体希釈質量分析法の利点とその限界について解説する（古田）（11）。
- 12 安定同位体トレーサー法による薬物と代謝物の分析例と体内動態解析への応用について解説する（柴崎）（12）。
- 13 分子標的薬の HPLC による血中濃度測定法と臨床における体内動態解析への応用について解説する（柴崎）（13）。
- 14 臨床で用いられる質量分析法（GC-MS、LC-MS）の基礎と応用について解説する（横川）（14）。
- 15 TDM における血中濃度測定と体内動態解析の臨床応用について解説する（横川）（15）。

■アクティブ・ラーニングの取組

レポート提出を毎回（複数）させている。

■成績評価方法

1) 形成的評価

- a: 知識：講義に関するレポートに基づき評価する。
- b: 技能：
- c: 態度：
- d: パフォーマンス：レポートのコピーを配り、相互評価することがある。

2) 総括的評価

- a: 知識：出席点、レポートなどで総合的に評価する。
- b: 技能：
- c: 態度：

d: パフォーマンス：形成的評価によって判断する。

■教科書

各講義において資料を配布する。

■オフィスアワー

講義終了後

■準備学習（予習・復習等）

講義資料を配布するので、よく読んで理解に努めること。

生薬学特論

1・2 年次前期 2 単位

担当者：三巻 祥浩、一柳 幸生、黒田 明平、横須賀 章人、蓮田 知代、松尾 侑希子

■学習目標 (G10)

薬学部での植物薬品学、漢方薬物学、天然医薬品化学を基礎とした生薬系大学院特論として、生薬・天然物化学の研究手法、医薬品開発への展開、漢方・生薬製剤の臨床応用例などを学び、医薬品としての生薬と漢方薬、および医薬品資源としての生薬・天然物の重要性を理解する。

■行動目標 (SBOs)

1. 生薬・漢方薬の歴史を説明できる。
2. 生薬・漢方薬の医薬品としての重要性を説明できる。
3. 代表的な生薬成分の抽出、分離、精製法を説明できる。
4. 機器スペクトルを用いた天然物成分の構造決定法を説明できる。
5. 機器スペクトルを用いて、基本的な天然物成分の化学構造を決定できる。
6. 代表的な生薬成分の基本骨格を列挙できる。
7. 代表的な生薬成分の生合成経路を概説できる。
8. 医薬品資源としての天然物の重要性を説明できる。
9. 天然物から開発された代表的な医薬品の基原と薬効を列挙できる。
10. 生薬・天然物成分をシーズとした医薬品開発の手法を概説できる。
11. 生薬・天然物研究におけるフィールド調査の重要性を説明できる。
12. 生薬・天然物成分の代表的な定性・定量分析法を列挙できる。
13. 生薬・天然物成分の生物学的分析法を説明できる。
14. 漢方薬の臨床応用例を概説できる。
15. 漢方薬と西洋薬の相互作用、および漢方薬の副作用を概説できる。

■授業内容

(回数、講義内容、担当者、対応 SBOs)

1. 生薬・薬用植物の基礎 (三巻) (1、2)
2. 生薬成分の分離・精製 I (一柳) (3)
3. 生薬成分の分離・精製 II (一柳) (3)
4. 機器スペクトルを用いた天然物成分の構造決定法 I (一柳) (4)
5. 機器スペクトルを用いた天然物成分の構造決定法 II (一柳) (4、5)
6. 生薬成分の化学構造的分類と生合成経路 I (松尾) (6、7)
7. 生薬成分の化学構造的分類と生合成経路 II (松尾) (6、7)
8. 生薬の生物活性と化学構造 I (黒田) (9)
9. 生薬の生物活性と化学構造 II (黒田) (10)

10. 生薬の歴史と医薬品開発Ⅰ（横須賀）（1、2）
11. 生薬の歴史と医薬品開発Ⅱ（横須賀）（2、8、9）
12. 生薬・天然物研究におけるフィールド調査と医薬品開発（蓮田）（10、11）
13. 生薬・天然物成分の定性・定量分析法（蓮田）（12、13）
14. 漢方薬の臨床応用と注意すべき副作用（三巻）（14、15）
15. 論述試験（三巻）

■アクティブ・ラーニングの取組

講義ごとに十分な余白のある補助プリントを配布し、重要事項や板書事項を書き込ませるようにしている。

できる限り講義に演習を取り入れている。

■授業で行っている工夫

講義のはじめにキーワードを提示し、講義の概要を把握してもらった後に詳細な解説を行っている。

学部時代に学んだことを復習しつつ、講義を進めている。

■成績評価方法

1. 形成的評価
 - a 知識：講義ごとにキーワードに関する口頭試問を行い、理解度をフィードバックする。(70%)
 - b 技能
 - c 態度
 - d パフォーマンス：ポートフォリオを作成させ、提出を求める。(30%)
2. 総括的評価
 - a 知識：論述試験、出席点、提出物を総合的に評価する。(50%)
 - b 技能
 - c 態度
 - d パフォーマンス：論述試験にパフォーマンス課題を取り入れる。(50%)

■教科書

なし。講義ごとに補助プリントを配布する。

■参考書

パートナー生薬学 改定第2版、南江堂
パートナー天然物化学 改定第2版、南江堂
薬学生のための漢方薬入門 第3版、廣川書店

■オフィスアワー

講義終了後、または講義終了後に予約すること。

■準備学習

予習：植物薬品学、機器スペクトル演習、漢方薬物学、天然医薬品化学で学んだ内容を復習して講義に臨むこと（薬剤師国家試験レベルでよい）。

復習：補助プリントおよび補助プリントに書き込んだ内容を復習すること。

■教員から一言

学部で学んだ内容を復習しながら、分かりやすく講義を進める。

担当者：平塚 明、藤原 泰之、早川 磨紀男、小倉 健一郎、西山 貴仁、高橋 勉、
藤野 智史、大沼 友和、鍛冶 利幸* (*東京理科大学薬学部環境健康学教室)

■学習目標 (G10)

各種疾病の様々な角度からの原因究明や化学物質の健康影響とその作用機構解析を通じて疾病予防に貢献するために、環境ストレスの生体影響と生体応答・生体防御機構ならびに医薬品を含む化学物質などのヒトへの影響と適正な使用などに関する基本的知識および最新の研究成果について学ぶ。

■行動目標 (SB0s)

1. 酸素の功罪を理解し、活性酸素の種類について説明できる。
2. 酸素ストレスに対する防御システムを概説できる。
3. 生理的、病理的条件下における活性酸素の産生について説明できる。
4. 低酸素ストレスについて説明できる。
5. 酸素ストレスと細胞内情報伝達について概説できる。
6. 環境汚染物質の健康影響評価とその対策について概説できる。
7. 有害金属と血管毒性の関係について説明できる。
8. メチル水銀の毒性発現機構について説明できる。
9. ヒ素の毒性発現機構について説明できる。
10. メタロチオネインと疾病予防との関連について説明できる。
11. 薬物代謝酵素とその変動要因について概説できる。
12. 薬物代謝酵素を理解し、化学物質の生体内代謝様式について説明できる。
13. 化学物質の代謝的活性化と不活性化について説明できる。
14. 化学物質による毒性の種類について概説できる。
15. 化学物質の特性を理解し、毒性発現機序について説明できる。
16. 化学物質のリスク評価について概説できる。
17. 解毒を担う薬物代謝酵素の発現制御機構について概説できる。
18. 代表的な薬害とその発生機構について概説できる。
19. 化学物質によるヒトへの影響と薬物代謝酵素との関係について説明できる。
20. 薬物代謝酵素の遺伝的多型性と化学物質によるヒトへの影響の関係について説明できる。

■授業内容

(回数、講義内容、担当者、対応 SB0s)

1. 酸素の功罪、活性酸素の種類、酸素ストレス防御システム(早川)(1,2)
2. 生理的、病理的条件下における活性酸素産生、低酸素ストレス (早川) (3,4)
3. 酸素ストレスと細胞内情報伝達 (早川) (5)

4. 肝硬変・肝再生と核内受容体（藤野）（4）
5. 環境汚染物質の健康影響評価とその対策（藤原）（6,16）
6. 有害金属の血管毒性とその発現機構（藤原）（7,15）
7. ヒ素の毒性発現機構（高橋）（9,15）
8. メタロチオネインの生理的役割並びに疾病予防との関連（高橋）（2,10）
9. メチル水銀の毒性発現機構（鍛冶^{*}）（8,15）
10. 薬物代謝の毒性学的側面（平塚）（11,12,13,14）
11. 生体防御酵素の亢進によるがん予防メカニズム（大沼）（17）
12. 薬物代謝酵素が関与する薬物の副作用発現機序（西山）（11,18,19,20）
13. 代表的な薬害とその分子メカニズム（小倉）（18,19,20）
14. 試験（平塚）

■アクティブ・ラーニングの取組

- ・ レポートを提出させる。
- ・ リアクションペーパー（アンケート）を実施する。

■授業で行なっている工夫

- ・ 講義毎に行動目標を伝え、さらにそれに関連するキーワードを提示する。
- ・ 講義を進行しながら適時、講義内容の理解の有無の問いかけをし、理解の進み方に応じて、補足説明を行なう。
- ・ 過去の中毒事例や公害事例を紹介することで講義内容に興味を持たせる。
- ・ 疾病予防に関連する最新の知識を習得できるように、衛生化学分野の最先端の研究成果を紹介することを心がけている。

■成績評価方法

1) 形成的評価

- a 知識：講義中に口頭にて講義内容に関する問いかけをし理解を高める。
- b 態度：講義期間中を通し出席、受講態度および課題の提出を確認する。

2) 総括的評価

- a 知識：記述試験および提出物を総合的に評価する。（60%）
- b 態度：出席状況および受講態度を総合的に評価する。（40%）

■教科書

- ・ 特に指定なし

■参考書

- ・ 各担当者が随時参考図書や文献を紹介する。

■ オフィスアワー

- ・ 在室の時はいつでも可。

■ 準備学習（予習・復習等）

- ・ 講義資料や参考資料を配布するので、よく読んで理解に努めること。

■ 教員からの一言

- ・ 講義内容に関して、講義中に活発に質疑されることを期待します。

担当者：新槇 幸彦、井上 勝央、白坂 善之、根岸 洋一、高島 由季、瀬田 康生(講義順)

■学習目標 (G10)

薬剤学は物理薬剤学、生物薬剤学、製剤工学、薬物送達システム学などからなるが、医薬品創製および開発においては薬物の化学的、物理的、生物学的性質を明らかにするためにこれら領域の知識が必要である。さらに、くすりは製剤として投与され、その有効性も製剤に依存する。有効性と安全性が高く使用され易いように工夫された、患者に最適なユーザーフレンドリーな製剤を製品化するためにはこれら薬剤学の知識を結集する必要がある。本特論では医薬品開発で重要な薬剤学の基礎知識および最新の研究例、トピックスや具体的問題について学ぶ。

■行動目標 (SBOs)

1. 医薬品としてのリポソーム製剤について説明できる。
2. ワクチン開発におけるアジュバントの重要性とリポソームのアジュバント活性について説明できる。
3. 免疫応答のバランスとImmunomodulatorとしてのリポソームについて説明できる。
4. 医薬品開発における薬物動態研究の重要性を説明できる。
5. 薬物の体内動態特性を考慮した薬物治療について概説できる。
6. PK/PDモデリング及び薬物治療におけるその適応例について説明できる。
7. 創薬と臨床をつなぐ薬物動態研究の意義と役割について説明できる。
8. 核酸・遺伝子医薬のDDSについて概説できる。
9. 次世代治療とDDSについて概説できる。
10. 医薬品創製における製剤設計の必要性、製剤化例およびその技術について説明できる。
11. 代表的な開発候補化合物の物性スクリーニング方法について概説できる。
12. プレフォーミュレーション研究およびその医薬品開発における役割について概説できる。
13. 医薬品の各開発段階における製薬技術の役割について説明できる。

■授業内容

(回数、講義内容、および担当者と対応SBO)

1. リポソームと医薬品開発 (新槇) (1)
2. ワクチン開発とアジュバントとしてのリポソーム (新槇) (2)
3. Immunomodulatorとしてのリポソーム (新槇) (3)
4. 医薬品開発における薬物動態研究 (井上) (4)

5. 薬物の体内動態特性を考慮した薬物治療の最適化（井上）（5）
6. PK/PD理論に基づく薬物治療の理論と実践（井上）（6）
7. 創薬と臨床をつなぐ薬物動態研究（白坂）（7）
8. 核酸・遺伝子医薬のDDS（根岸）（8）
9. 次世代治療とDDS（根岸）（9）
10. 創薬・LCMにおける製剤設計の役割とその技術 その1（高島）（10）
11. 創薬・LCMにおける製剤設計の役割とその技術 その2（高島）（11）
12. Drugability とDevelopability - 創薬と物性 その1（瀬田）（12）
13. Drugability とDevelopability - 創薬と物性 その2（瀬田）（13）
14. 記述試験

■成績評価方法

1) 形成的評価

- a. 知識: 講義中の質疑応答により、繰り返しの知識の到達レベルを確認している。
- b. 態度: 出席状況、受講態度および課題提出状況を確認し、フィードバックしている。

2) 総括的評価

- a. 知識: 定期試験によって評価する。（70%）
- b. 態度: 出席状況、受講態度および課題提出状況によって評価する。（30%）

■準備学習(予習・復習等)

- ・薬剤学関連領域の基礎から最新の話題に関する講義になります。学部で学習した「生物薬剤学」、「物理薬剤学」、「製剤工学」、「薬物送達学」、「免疫学」の関連領域に関してはしっかり予習をし、講義に臨むこと。

■教科書

各講義においてハンドアウト資料を供する。

English Writing for PhD Candidates– Syllabus

1年次前期2単位

Instructor	Sebastian Brooke	E-mail	sjbrooke@hotmail.com
Office	Part-time faculty office	Office Hours	By appointment

■ Description (GIO) :

This course aims to assist PhD candidates in improving their reading, writing, and speaking skills in scientific research. The Journal of the American Pharmaceutical Association will be used as a resource to read, analyze, and summarize sample research articles. The Journal will also serve as a template for students' own science research writing.

■ SBOs :

1. An introduction to the conventions of academic publishing.
2. Understanding abstracts and their contents for research publications.
3. Understanding and writing introductions for journals.
4. Designing and revising a research introduction.
5. Introduction to the key components of methodologies.
6. Designing and revising academic methodology components.
7. Focus on writing clearly and academic writing conventions.
8. Introduction to data presentation and the results component of research papers.
9. Designing, revising, and presenting academic results.
10. Academic writing for science subjects – a workshop.
11. Introduction to the discussion and conclusions components of research papers.
12. Designing and revising conclusions in research writing.
13. Review of academic research papers in the pharmaceutical fields.
14. Presentation of academic research.

■ Course Schedule

Week		Topic	Required Reading
Monday 18:30~	Wednesday 15:30~		
4/11	4/6	Introduction: components of a science research article; a look at sample journal abstracts (1)	All assigned reading must be completed prior to the next class meeting. Supplementary materials will be provided by the instructor
4/18	4/13	Abstract design and titles (2)	
4/25	4/20	Abstracts continued (2)	
5/2	4/27	Introductions (3)	
5/9	5/11	Introduction Design (4)	
5/16	5/18	Methodologies (5)	
5/23	5/25	Writing workshop: Intro to Academic Writing (7)	
5/30	6/1	Methodology Design (6)	
6/6	6/8	Data and Results (8)	
6/13	6/15	Writing workshop: Intro to Academic Writing (10)	
6/20	6/22	Data / Results Design (9)	
6/27	6/29	Discussion / Conclusions (11/12)	
7/4	7/6	Writing workshop: Intro to Academic Writing (10)	
7/11	7/13	Review of target articles (13)	
7/25	7/20	Final oral presentation of research (14)	

■ Active Learning:

Students will lead discussions of self-selected research topics and contribute to group discussions when not acting as leaders

■ Evaluation:

Students will be evaluated according to their level of preparation, participation in discussions, and final oral presentations of their own research writing at the end of the semester.

■ Preparation for Classes:

Students will prepare by reading all handouts before class and preparing discussion topics and questions based on current research in their fields.